



博物館明治村

～明治時代を体験・体感できる野外博物館～

中 野 裕 子

昨今、文化財の有効活用について、活発な議論がなされている。明治時代の建造物を展示公開している野外博物館、博物館明治村（以下、明治村と表記）の所有する歴史的建造物も例外ではない。ここでは明治村の誕生から今日までを概観し、歴史的建造物、特に近代の建造物に対する人々の認識の変遷を確認し、明治村が歴史的建造物の保存、活用において果たした役割を述べる。また、博物館として「学び」と「遊び」を両輪とすることで、見学者の興味を喚起し、建造物や歴史を含む文化への深い関心を誘う試みについて紹介する。

キーワード：野外博物館、歴史的建造物、明治時代、鹿鳴館、文化資源、移築復元

1. 明治村設立の経緯

明治村は昭和 40（1965）年 3 月に開館し、2015 年に 50 年の記念の年を迎えた。

まず、明治村設立の沿革について簡単に紹介する。

明治村は、後に初代館長となる建築家谷口吉郎（写真—1）が、昭和 15（1940）年、老朽化などの理由により「鹿鳴館（写真—2）」が、突如取り壊されたのを目の当たりにしたことに端を発している。明治村は、谷口の自分が生まれた「明治」という時代を象徴する建物を遺せなかった無念さから、「取り壊し」の運命にある明治建築を移築保存し、一般に公開したいとの思いから始まった事業である。

鹿鳴館は、明治政府のお雇い外国人 J・コンドルの設計による明治政府肝煎りの社交場である。時の外務卿井上馨が江戸時代末に結んだ不平等条約改正のた



写真—2 鹿鳴館



写真—3 貴顕舞踏の略図



写真—1 谷口吉郎

め、制度のみならず生活や習慣までも欧米化を企て、その一環として欧米の貴賓接待と上流階級の社交場として明治 16（1883）年に竣工した。その様子は錦絵と呼ばれる多色刷り木版画（写真—3）や外国人が描いた風刺画など多くに描写され、鹿鳴館時代とてはやされ、「鹿鳴館」は文明開化と並んで明治時代を象

徴する言葉ともなった。

日本の近代化の源となった明治時代を象徴する鹿鳴館の取り壊しは谷口に大きな衝撃を与えたに違いない。鹿鳴館の取り壊しからほどなく谷口は、当時の東京日日新聞に「明治の愛惜」と題して、次のように寄稿している。「先日、日比谷の近くを通ると、黒門の奥にあった鹿鳴館の姿が消えているのに驚いた。(中略) 鹿鳴館の建築を保存し、明治に生まれた人々が心を合わせ、所持品や記録を持ちよって博物館にしたなら、明治を記念する記念館となったろう。それこそ次の時代におくる有意義な贈り物となったろうと思うと、惜しい気がしてならない。」¹⁾

新聞への寄稿から20年程経ったある日、旧制第四高等学校の同窓会が行われた。金沢の九谷焼の間屋に育ち、第四高等学校の理科を卒業した谷口は胸に秘めていた明治村構想を、同窓会の席上で友人らに熱く語った。その場にいた当時名古屋鉄道の副社長・土川元夫、文部省国宝鑑査官、後に文化庁となる文化財保護委員会の主任文化財調査官で墨跡研究の第一人者・田山方南は谷口の意見に賛同し、その日から明治村構想を実現させるべく第一歩を踏み出した。谷口と土川は関東地方で明治村を開設したいと考え、自治体や鉄道会社などに話を持ちかけはしたものの色好い返事を得ることができず、紆余曲折の末、土川が経営陣を務める名古屋鉄道の協力を仰ぎ、現在の愛知県犬山市の入鹿池のほとりでの開設が決まった。

昭和36(1861)年に設立準備委員会が発足、翌年財団法人明治村の設立の認可を受け、初代会長に渋沢

敬三が就任した。そして建築委員会が組織され、優れた明治時代の建造物を取り壊されるとの情報を得ると、急病人を救う救急車の如く、東奔西走し、南は京都から北は北海道までの建造物15件を移築し、開館にこぎつけた。時あたかも高度経済成長の真只中で、道路拡幅や土地の有効活用のために第二次世界大戦の戦火を幸運にも逃れた多くの優れた明治建築が取り壊しの危機に瀕していたのである。

救出された15の建造物は、愛知県犬山市の名古屋鉄道株式会社が所有していた入鹿池を眼下に望む50haの丘陵地に移築され、昭和40(1965)年3月18日に開村記念式典を挙行(写真—4)、翌19日から一般公開が始まった。一方、明治時代の建造物の救出作業は絶え間なく、開館後10年を経た昭和50(1975)年には、敷地面積は倍の100ha、移築建造物の数は40件を超えた。2012(平成24)年には公益財団法人の認定を受け、現在では移築された建造物の数は64



写真—4 開村式典の様子(1965年3月18日)



図—1 明治村へ移築された建物の旧所在地一覧

件と設立当初の4倍に及んでいる。建造物は国内のみならず、ブラジル・アメリカからも移築され、教会堂、学校、役所の公共建築、商家、芝居小屋、文学者ゆかりの住宅などバラエティに富んでいる（図—1）。

2. 明治村の使命と事業

明治村設立時の設立趣意書には「明治時代の各種の歴史資料を収集管理して博物館を設置し、広く一般に公開するとともに、明治の新しい精神に立脚した社会教育の振興により、現代及び将来の国民大衆に歴史の指針を与え、その一般教養の充実に資することによって、文化の向上に寄与することを目的とする。」と記載されている。

明治村は、この使命を実現させるための事業として、(1) 明治時代に作られた建造物等の展示、公開及び調査研究、(2) 明治文化の普及に資する催事、(3) 明治時代の精神に立脚した社会教育振興のための講演会及び講習会、(4) 明治時代の体験事業などを行っている。各々の事業について、概略を述べる。

(1) 建造物の移築保存と展示公開

明治村へ移築する建造物は前述のように、取り壊しが決まったものが対象となっている。建物の保存は元あった場所で行われるのが望ましい。なぜならば建造物はその土地の歴史や風土、立地条件を考慮して建てられるからである。そのため、移築を行うことによりその建造物の特色が見出しにくくなってしまうのだ。つまり移築という手法は建造物を遺すための最終手段とも言えるであろう。「明治という時代の意匠的・技術的な面において特色がある」「明治時代を代表する人物に縁がある」などの条件を満たす建造物が解体されるという情報を得ると、建築委員やそれに協力するスタッフが調査を行い、建造物の移築の可否、解体、移築再建となる（写真—5）。特に解体の際には、再



写真—5 移築工事中（森鷗外・夏目漱石住宅）

建時のために、部材一つ一つに番付けをするなど、取り壊しとは異なり丁寧な作業が要求される。竣工した建物は、建物の良さを体感していただく場、歴史資料などの展示室、体験展示室などと活用している。調査研究としては「移築工事報告書」、「修理工事報告書」として刊行するほか、修理工事や調査活動で得た知見をタイムリーに季刊誌「明治村だより」で紹介している。

(2) 明治文化の普及に資する催事

明治村は3万点を越える資料を収蔵している。特筆される資料としては、鹿鳴館や明治宮殿、旧東宮御所（現 迎賓館赤坂離宮）で使用されたいわゆる「宮廷家具」、F・L・ライトや武田五一、遠藤新などがデザインしたものからなる家具のコレクションがまず挙げられる。膨大な量と質は国内で他に例を見ないのである。これら家具コレクションは単に展示し鑑賞に供するだけではなく、例えば椅子ならば、見学者の方が実際に腰掛けて座り心地や室内空間を体感していただくことができるなど、明治村ならではのユニークな展示方法を取っている（写真—6、7）。

次いで、近代化遺産として近年その価値が見直され



写真—6 西郷従道邸内部の様子①



写真—7 西郷従道邸内部の様子②



写真—8 リング精紡機

ている機械類が挙げられる。日本の鉄道黎明期に建てられた「鉄道寮新橋工場」の中には、重要文化財に指定された二つの機械「菊花御紋章付平削盤（岩手県寄託）」「リング精紡機（写真—8）」のほか、2014（平成26）年世界遺産に指定された富岡製糸場で使用された「ブリュナエンジン」、日本での特許制度制定の契機ともなった「ガラ紡績機」など日本の近代化の礎ともなった機械が展示され、見学者の理解を促すために一日に2回ボランティアが解説を行っている。また、日本赤十字社旧蔵の文書・書籍・写真からなる「日赤文庫」、近代文学研究者で明治村の評議員でもあった成瀬正勝氏旧蔵書の「成瀬文庫」、その他多色刷り木版の錦絵から生活道具まで多岐にわたる資料を収蔵している。

これらの収蔵資料は展示として活用されるだけでなく、資料を核としたイベントの開催、エンターテインメント的なイベントに歴史資料を活用し、遊びながら学べる楽しい博物館づくりを行っている。特に春秋に開催している「謎解きゲーム」は一年間の入村者のおよそ16%にあたる利用者がおり、その人気の高さがうかがえる。

（3）講演会及び講習会の実施

明治村では2010年から、広く明治という時代を理解していただくために「明治塾」を、そして2015年からは明治村の周知と理解を深めてもらうことを目的とした「シンポジウム」を開催している。

「明治塾」は、ともすれば縦割りになりがちな明治時代に関するそれぞれの学問の分野を横断的に見ること、学問の広がりだけではなく、産業や交通・街の発達、芸術の振興などが複雑に絡み合い、新しいものを生み出しそれが今日の様々なものの礎になってきたことに気づいていただく契機となることを目論んで計画し、年数回、明治村で開催している。

「シンポジウム」は2015年に作家・阿川佐和子氏の

村長就任を機に、明治村の認知率をあげるべく、阿川村長、中川武明治村館長とゲストスピーカーという構成で、明治村の場としての活用の促進、歴史的建造物保存の意義などを伝える場として、年1回程度開催している。

（4）明治時代の体験事業

体験事業として、まず挙げられるのが蒸気機関車（写真—9）や京都市電の運行と見学者が体験として乗車できることである。蒸気機関車は12号と9号の2両を所有し、おおよそ2週間交代で運行している。特に12号機関車は1874年に輸入され、鉄道草創期に新橋—横浜間を走行した現在国内で最古の運行車両である。京都市電は、奠都により京都の衰退を憂え、国から得た産業基金を元に、琵琶湖疏水事業を起こし、疎水を利用した発電によって得られた電力によって運行が可能になった国内初の市内電車で、1895年に京都で開催された第4回国内勧業博覧会の際の見学者輸送として開業した。明治村で運行している車両は1911-1912年に製造され、京都市内の北野線を走った。



写真—9 蒸気機関車12号

近年人気があるものに、明治から大正時代にかけて流行した女学生や書生の衣装を着用し、記念撮影や散策をすることができる「ハイカラ衣装館」が挙げられる。見学者自らが衣装を纏うことでタイムトリップしてもらうものである。

その他、学校、特に小学生の団体向けには、多色刷り木版画の錦絵体験や、ガラ紡績機で紡いだ糸を用いたコースター作りを予約制で行うほか、タブレット向けに社会見学の専用アプリを開発し、遠足や社会見学に利用いただいている。

3. 明治村が社会に果たした役割

移築された64件の建造物のうち11件が、明治村へ移築後、重要文化財の指定を受けた。裏返して言うならば、もし明治村がなければこれらの重要文化財も灰塵に帰していたことになる。明治村の開村前の近代の建造物の評価は、決して高いものとは言えなかった。現在は国宝・重要文化財に指定されている近代の建造物の数は350件程²⁾となったが、昭和40年では、泉布館（大阪市）、ハッサム住宅（神戸市）、岩崎家住宅（東京都文京区）など数える程しかなかった。

明治村は、今でこそ年間50万人程度の入村者であるが、開館から20年間にわたって入村者数は100万人を数える見学者を迎え入れてきた。この実績は地方公共団体や近代の建造物の所有者などに大きな刺激を与え、近代の建造物を保存活用することで地域の文化資源となることを知らしめたといえる。

また歴史的建造物の移築保存の技術において、一箇所で数多く、そしてバラエティに富んだ建造物の維持修理を行っている実績から、他の所有者の良き鑑ともなっている。

さらに明治村では近年テレビや映画のロケが数多く行われる。これは建造物を守るだけでなく、景観も含めて整備をおこなっているため、幕末から昭和初期に至るまでの時代を撮影する絶好のポイントとなっているからである。

4. 建物の歴史には物語がある

明治村の数ある歴史的建造物の中で、最も人気が高いものの一つが帝国ホテル中央玄関（写真—10）である。大正12（1923）年9月1日に竣工したこのホテルは、竣工披露のパーティーがあと1時間に迫った時に関東大震災に見舞われた。20世紀を代表するア



写真—10 帝国ホテル中央玄関

メリカ人建築家フランク・ロイド・ライトの設計によるこのホテルは、未曾有の大震災にもかかわらず、幸いにも軽微な損傷にとどまり、逆に多くの被災者を救済する場となった。その後長らく日本の国賓などを接遇する接客の場として、ライト建築の傑作として国内外から多くの賞賛を集めてきた。しかし、このホテルも増加する宿泊者の対応が困難になり、加えて建物の老朽化が進行し、新たなホテル建設の声が高まってきた。

しかし、20世紀の名建築を後世に遺したいという多くの声にもかかわらず、ホテル側は解体、新ホテル建設を決定。その後、劇的な展開となる。時の首相佐藤栄作が訪米し、日米首脳会談を終え、帰国会見に臨んだ際、ジャーナリストから「帝国ホテルをどうするのか」という質問が浴びせられた。その際即座に佐藤首相は「明治村へ移築する」と答えたのだ。その発言があつて帝国ホテルは中央玄関部分のみであるが明治村へ移築することができた。

このような物語はどの歴史的建造物においても、その建造物の誕生から明治村への移築までの歴史を紐解くことで、紡ぎ出されるのである。紡ぎ出された物語をいかに見学者に伝え、建造物を遺す意義を認識していただくことは、とても重要と考える。

5. おわりに（写真—11）

来年は明治と改元されて150年。そして先日、来年平成30（2018）年を以て平成という時代に終りを告げることが国会で決まった。詩人・中村草田男が元号の移り変わりとともに時代が移りゆくことに郷愁を込めて「降る雪や 明治は 遠くなりけり」と詠んだのは昭和6（1931）年であった。建築史家・藤森照信は「ありふれたものほど後世には伝えにくいものです。（中略）建物博物館が造られる目的のひとつは、そうした、普通の人々が暮らした住まいを保存していくことにあるでしょう」³⁾と述べている。明治村のような野外博物館は建築の様式や意匠・技法、室内で用いられ



写真—11 空から見た明治村

た生活道具などを単体でなく、それらすべてを包括的にかつ建造物にかかわる人々の歴史とともに見せることで、人が人として生きていく上でのアイデンティティを確立させることができる稀有な博物館となりうると考える。そのために何をすればよいのか、決定的な答えはない。設立後50年を超えた明治村では、移築建造物の修理工事が目白押しである。これらを健全な状態に保ちつつ、かつ、見学者のニーズに耳を傾け、身近に歴史を感じていただけるような試みをしていきたい。

JCM/A

《参考文献》

- 1) 谷口吉郎, 「明治村縁起」(『谷口吉郎著作集 第一巻 建築紀行』) 淡交社 P389 1981年11月
- 2) http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/pdf/2017051903_besshi.pdf
- 3) 藤森照信「“生きた” 野外博物館を目指して」(広岡祐『たてもの野外博物館探見』) JTB P4 2000年8月

[筆者紹介]

中野 裕子 (なかの ゆうこ)
博物館明治村
学芸員

